堀辰雄「(杜甫訳詩)」ノート

――折口信夫〈貴種流離譚〉との接点から――

劉　娟

第一章　まえがき

堀辰雄は「昭和十四、五年ごろ」に中国古典に関心を寄せて（堀多恵子「座談会　堀辰雄　人と作品」（「四季」昭44・7）による）以来、「めざましい勢いで」漢籍類の蔵書を増やしつつ、中国古典に対しての猛烈な学習ぶりを示していた（神西清「高原の人」（「新女苑」昭25・12）による）。その学習形跡の一部を、彼が残した大量の蔵書メモのほか、下記の五つのノートから窺知することができる。

⑴「支那古詩㈠」　⑵「支那古詩㈡」
⑶「(杜甫訳詩)」　⑷「(支那古詩抄)」
⑸「(花の話・詩経)」

（注：『堀辰雄全集　第七巻（下）』（筑摩書房　昭55・6）を参照。⑴～⑸の番号は本稿の説明便宜上附したものである。なお、「(杜甫訳詩)」のように、丸カッコつきのものは堀以外の者によって付けられた題である。さらに、これらのノートのうち、ノート⑵及びノート⑶にはそれぞれ15篇の杜甫訳詩が収録されている。）

これらのノートについて、稿者は今まで、ノート⑸における『詩経』の受容は、折口学（折口信夫の学問）を意識した上での、未完成の万葉小説への下準備であることを述べた（「堀辰雄における「万葉小説」への憧憬」（「文学史研究」令2・3））。また、ノート⑷にある「李易安詞抄」は、〈恋する女性〉のモチーフを中国閨秀文学から探り求める意図の下で成立したものであることを指摘した（「堀辰雄と中国閨秀文学」（「国語国文」令3・5））。さらに、堀がノート⑵に訳した15篇の杜甫訳詩は、一つの緻密な秩序の下で組まれた成都・夔州両時期の生活ドラマとして読みとれる可能性を提示し、訳詩で表した詩趣が、堀が同時期に抱えていた二通りの〈万葉小説〉の小説プランと一脈通じることを論じた（「堀辰雄「支那古詩㈡」ノート考」（「人文研究」令6・3））。このように、堀の中国古典受容はその文学営為における重要な一角であると、今までの考察で証してきたところである。

本稿はそれに継いで、ノート⑶「(杜甫訳詩)」をとり上げ、「晩年の堀の心情が仮託されている」といった「一般論的解釈」（岡本文子「堀辰雄・杜甫訳詩考」（「和洋女子大学紀要　文系編」

昭62・3）で片付けられてきた従来の観点を覆し、堀における杜甫受容の実像を示したい。

具体的には、以下のような考察手順に従って論を展開していく。第二章はノート自体への考察を深め、堀が原詩を書き込むために用いたテキストを究明し、典拠から堀訳に至るまでの変容過程を整理し、ノートの生成過程を明らかにする。続いて第三章は、ノートの内容全体を再検討し、堀文学と関連させながら「（杜甫訳詩）」ノートにある15篇の訳詩の主題を探りだす。さらに第四章は、折口信夫〈貴種流離譚〉の影響を視野に取り入れた上で、堀文学に立ち戻ってノートの成立内因を析出し、堀が〈杜甫〉に惹きつけられた最大の要因を引き出す。

第二章　「（杜甫訳詩）」ノートについて

1、ノートと先行研究

「（杜甫訳詩）」ノートは、中判ノートの断片（縦19、2㎝×横12、8㎝）24枚を横長に用い、その両面に鉛筆と青鉛筆で縦書きしたものである。ノートには15篇の杜甫訳詩が収録され、そのうちの2篇が、訳詩題のほかに原詩題名も記されている。ノートの翻刻・掲載は、内山知也の『堀辰雄　杜甫詩ノオト』（昭50・12　木耳社）における「王宰の画に題す」「放逐せられし李太白に」の2篇の活字化が嚆矢となる。その後、筑摩書房版『堀辰雄全集　第七巻（下）』（昭55・6）においてはじめて、ノート全体の翻刻が行われた。

堀が日本語にした15篇の訳詩題名及び（原詩題目）は以下の通りである（掲載順は筑摩書房『堀辰雄全集　第七巻（下）』に従い、詩のあて番号①～⑮は稿者が便宜上に附したものである。ノートに記してある原詩題名をゴシックで表示し、文字囲み表記は堀による）。

①佳人の歎き（佳人）　②王宰の画に題す（戯題王宰画山水図歌）
③新婦は歎きぬ（新婚別）　④放逐せられし李太白に（夢李白二首　其一）　⑤李太白に（寄李十二白二十韻）　⑥秋の逍遥（**登高**）　⑦晩帰（野望）　⑧舟上の美人（麗人行）
⑨李太白を憶ふ（春日憶李白）　⑩歎き（秋興八首　其三）
⑪秋（秋興八首　其六）　⑫痛しき追憶（秋興八首　其八）
⑬若き日の友に（贈衛八処士）　⑭異郷の愁（秋興八首　其一）
⑮古城址にて（**玉華宮**）

（注：長谷部剛「ドイツ語のなかの杜甫」（「関西大学東西学術研究所紀要」平27・4）では、筑摩書房『堀辰雄全集　第七巻（下）』は、ノート37頁を⑪「秋」の後半部に充てているが、それは⑭「異郷の愁」の後半部に相当し、45頁を⑭「異郷の愁」の後半部に充てているが、それは⑪「秋」の後半部に相当することを指摘している。本稿における⑪と⑭の引用は、長谷部説に従っている。）

「（杜甫訳詩）」ノートにある15篇の訳詩から⑦「晩帰」を一例として掲げる。

東から昇つて、秋の日がいま牧場を横切つてゐる。そして西の方、大きな山の中に没する。微光が天に残つてゐる。
枯木が上の方だけ菫銀色に赫いてゐる。

夕方の風が木の枝でまだ最後の葉を鳴らせてゐる。鶴が、さびしく、悲しみに充ちて、その巣の方へためらひがちに飛んでゆく、……
群鴉が枯れた木のまはりに啼き立つてゐる。半月が夜寒に憂愁に充ちて昇つてくる。

これまでに、「(杜甫訳詩)」について触れた論考に、以下の4点がある。

・内山知也「堀辰雄の《支那趣味》」(『日本近代文学』昭46・5)
・岡本文子「堀辰雄・杜甫訳詩考」(『和洋女子大学紀要　文系編』昭62・3)
・長谷部剛「ドイツ語のなかの杜甫――堀辰雄の「杜甫訳詩」とのかかわりを中心に――」(『関西大学東西学術研究所紀要』平27・4)
・長谷部剛「堀辰雄の杜甫訳詩について(承前)」(『関西大学東西学術研究所紀要』平29・4)

最初の内山論は正面から「(杜甫訳詩)」ノートを論じたわけではないが、後にノートの典拠だとされる *Pfirsichbluten aus China*(1922 Ernst Rowohlt Verlag)にある17篇のドイツ語訳について、堀が朱筆で詩題、詩人名及び漢詩原詩本文を書き込んでいることを報告し、典拠の特定はじめ後出論考のために重要なヒントを提示している。次の岡本論は、ノートにある4篇の訳詩を対象に論じ、「堀と杜甫詩との接点に、折口信夫による霊魂観が大きく介在する」と主張する。その上で、「直接折口的霊魂観に結びつく」ことが難しい残りの詩は、「訳出の意図を問うこと自体」が「無意味」であるとしている。続く長谷部論ではノート自体の検討に力点を置き、典拠の特定や、堀が推定できなかった8篇の訳詩の原詩調査等において成果を上げている。さらに長谷部は、堀訳と典拠のドイツ語訳を対照的に掲げ、堀は杜甫の原詩からではなく、「ドイツ語訳をそのまま和訳した」と述べている。最後の同氏による論考は、堀のもう一つの杜甫訳詩ノート「支那古詩㈡」(第一章　ノート⑵)について論じたもので、ノート⑶「(杜甫訳詩)」とノート⑵「支那古詩㈡」には、共通的な収録訳詩が4篇ある。堀がドイツ語訳を典拠にしてノート⑶「(杜甫訳詩)」を訳す時点では、それら4篇の漢詩原詩を悉く特定できなかった。のちに森槐南『杜詩講義』(大1　文会堂書店)などの杜甫の注釈書を参照することによって、「秋興八首」にある4篇であることに気づき、改めてそれらをノート⑵に訳したという経緯を推定した。以上のことから、ノート⑶「(杜甫訳詩)」は、堀が中国古典に親しみ始めた「昭和十四、五年ごろ」(堀多恵子「座談会　堀辰雄　人と作品」(本稿「第一章」に既出))から、『杜詩講義』を入手した昭和17年7月(7月23日　堀多恵子宛書簡)までの成立だと明らかにした。

本稿は、先行研究を踏まえ、これらの研究においても明らかになっていない堀が用いた漢詩原詩のテキストの究明を含むノートの生成過程を追究していく一方、ノートの内容を再考し、堀が杜詩を訳す衝動に駆られた内的必然性に肉迫していく。

2、漢詩原詩のテキストについて

「(杜甫訳詩)」ノート収録詩の典拠 Hans Bethge（ハンス・ベートゲ 1876～1946）の *Pfirsichblüten aus China*（前出・堀の命名によると『支那詞華集』、**以下『詞華集』と称す**）は、80篇の詩を収載したドイツ語漢詩訳詩集である。中でも、杜甫の詩が最も多く17篇が採用されている。堀はそのうちの15篇を日本語に訳し、「(杜甫訳詩)」にまとめている。

前節で述べたように、内山知也は早い段階から堀の蔵書を調査し、堀旧蔵の『詞華集』に原詩の書込みがある17篇の詩の題名を掲げた（詩題と詩人名、初句のみ並べてあり、具体的な書込み内容は掲載されていない）。

滕王閣（王勃）　従軍行（楊炯）　過故人荘（孟浩然）　幽居（韋應物）　落日（杜甫）　佳人（杜甫）　戯題王宰画山水図歌（杜甫）　新婚別（杜甫）　春宿左省（杜甫）　登高（杜甫）
夢李白二首其一（杜甫）　春日憶李白（杜甫）　玉華宮（杜甫）
採蓮曲（王昌齢）　宋中（高適）　田家雑興（儲光羲）　春夢（岑參）　（傍線引用者）

右記のように、杜甫の詩が合計9篇書き込まれている。「落日」「春宿左省」の2篇以外はすべて「(杜甫訳詩)」ノートに記されている。堀はノートに書いた15篇の詩のうち、7篇（傍線で表示）は原詩にたどり着くことができたようである。後に、長谷部剛は内山論を踏まえ、内山論で触れた『詞華集』を典拠だと定め、残りの8篇の訳詩の原詩を探り出した。この段階で、ノートの典拠及び杜甫の原詩はすべて明らかにされている。

しかし、堀自身が漢詩原詩を特定する際に用いたテキストの究明が、「重要な問題」（長谷部平成27年論文）として残されているのである。

稿者は堀旧蔵『詞華集』（神奈川近代文学館堀文庫所蔵）にある堀の書込みメモ内容を調査し、そこで、「玉華宮」という詩は、原詩のみでなく、以下のような解説内容も記されてあることが分かった。

此詩、杜甫鄜州路に趣き、離宮の／荒廃せるを見、生を憂ふるの嘆を発せ／るなり
（注：「／」は堀が改行した箇所である。）

堀はドイツ語訳詩集とともに、何らかの漢詩解説書を用いて「玉華宮」を読んだと思われるのだが、上記の摘記内容と全く一致するものが、漆山又四郎が訳注した『唐詩選　上巻』（昭6・5　岩波書店）にある（「趣き」の字づかいも同じである）。堀蔵書目録ではその本の所蔵は確認できないが、彼の身辺の人の記憶によると、「和本の唐詩選を机に置いて」（丸岡明「堀辰雄よ」（『堀辰雄　人と作品』昭28　四季社　所収）いたそうである。堀が漆山の『唐詩選』（上下二冊）を座右の書として親しみ、更にドイツ語訳詩の原詩究明や解読のために使っていたと推定できる。

ところが、堀が『詞華集』に書き込んだ17篇の詩のうち、漆山の『唐詩選』には7篇（杜詩計3篇、うち2篇はノートにある）しか収録されていない。堀は『唐詩選』とともに他のテキストも参考にしたようだが、残りの10篇の二次典拠をすべて同

一の書物から見つけることはできなかった。ただ、杜詩関係のものに関しては、堀の書き込んだ9篇の杜詩がすべて収載され、なおかつその原詩本文内容と全く一致するものは、同じく漆山による『杜詩　訳註』（昭4　岩波書店）があった(一)。さらに、「支那古詩㈡」（第一章　ノート⑵）にある「茅屋秋風の爲に破らるるの歌」という詩題の日本語訳及び、「柟樹為風雨所拔歎」という詩の制作時期（永泰元年三月）も同書を参照している（前掲拙論「堀辰雄「支那古詩㈡」ノート考」）。ただし、前述の「玉華宮」という詩の解説文は、「此詩は、杜甫鄜州路に趨いて経見する所を記し、兼ねて家に至る情況を述べしなり」とあり、上掲の堀メモ内容と異なっている点から、堀が同氏の二書を照らし合わせながら杜詩を読んでいたと推測される。

しかし、ノートの生成過程において、漆山のテキストが実際に関与したかどうか、以下は『詞華集』に着目しながらその点を解き明かしていく。

3、典拠から堀訳へ――洋書から漢詩へアプローチする方法

『詞華集』に収載される訳詩は基本的に、仏語漢詩訳詩集 *Poésies de l'époque des Thang*（Hervey Saint Denys, 1862　Amyot・**以下『唐詩』と称す**）及び、*Le Livre de Jade*（Judith Gautier, 1867 Alphonse Lemerre・**以下『玉書』と称す**）から採った詩を更にドイツ語に重訳したものである(二)。

19世紀半ばまでは、西洋における漢詩の紹介は普及しておらず、『唐詩』と『玉書』の二つの漢詩訳詩集は、「アメリカやヨーロッパにおける唐詩の紹介の先駆的役割を果たす」（門田真知子『クローデルと中国詩の世界』平10・2　加賀出版）ものである。前者は「初めての中国詩の原詩からの訳」（TRADUITES DU CHINOIS POUR LA PREMIÈRE FOIS）との副題があるように、漢詩翻訳の嚆矢である。後者は小説家テオフィール・ゴーチェの娘ジュディット・ゴーチェの処女作であり、発表されてから瞬く間に話題を呼び、海外で広く翻訳されて漢詩西洋訳のブームを巻き起こした。ドイツ語圏における漢詩の翻訳も、この両書に触発される形をとっている。

が、ジュディットの『玉書』は芥川龍之介に「八分までは「創作」（「パステルの龍」（「人間」大11・1））と言われているように、その『玉書』を典拠の一つにした『詞華集』も、「中国詩の印象訳にすぎず、ジュディットのフランス語訳をさらに歪めて訳詩とした形跡がある」（門田真知子『クローデルと中国詩の世界』前出）ものである。堀がノートに訳した15篇の杜詩の中、7篇しか原詩に辿りつけなかったのは、典拠の時点ではすでに漢詩原詩の意味内容から大きくかけ離れていたからである。

本章第1節で述べたように、長谷部は「ドイツ語訳をそのまま和訳した」と指摘している。稿者はさらに『詞華集』から堀訳に至るまでの変容過程を整理し(三)、堀がドイツ語典拠にかなり忠実に従っていたことを細部に渡って確認できた。前述の漆山のテキストを用いて7篇の漢詩原詩を特定できたにも関わらず、彼が実際に訳詩を為すにあたっては、もっぱらドイツ語のそれに依拠し、原詩に戻そうとする形跡が全く認められないのである。その意味で、「（杜甫訳詩）」ノートにおける訳出行

為は、杜詩そのものよりも、西洋の色眼鏡を通した〈杜詩〉への享受に主眼が置かれていたと言える。

堀が杜詩を訳した昭和10年代半ば頃は、漢詩が日本文壇の舞台から退きつつある時代であった。当時では陳腐化し時代に合わなくなったものとして扱われていた漢詩が、西洋人によって面目一新にデフォルメされたのは、新鮮な驚きであっただろう。日本では、これらの西洋の漢詩訳に触発されつつ、今まで伝統の一部としてしか認識されなかった中国古典を、改めて西洋のフィルターをかけて眺めることによって新たな面白味を覚えるようになる。さらに、異国の言葉を訓読の方法でそのまま鵜呑みにするという従来の態度を一変し、自分の国の大和言葉に吹き替える試みがやや盛んになる(四)。

堀の蔵書目録を見ると、漢文学関係の洋書が散見される。さらに、彼は李白詩集を英訳で読み（昭和17年7月23日　堀夫人宛書簡）、陶淵明をヴァレリー（Paul Valéry）の解説をもって勉強し（前掲の内山論で言及）、『詩経』をフランス語訳で学んだりして（堀蔵書『詩経』（岡田正三　昭11　第一書房）に、*Chi-King ou Livre des vers*(1872 Par G. Pauthier,Paris)の仏訳を書き込んでいる）、西洋人が極東文化を異国情緒に溢れた新奇なものとして見る時のみずみずしい眼で、古びた中国古典を再読しようとする堀の姿勢が窺知できるのである。

第三章　流離の運命を生き抜く「トラヂック」な人間群像

1、ノートの内容について

「(杜甫訳詩)」ノートの内容について分析を行った先行論として前述の岡本の「堀辰雄・杜甫訳詩考」がある。岡本は堀が原詩を特定できた7篇のうちの4篇のみを考察対象とし、さらにその中の3篇の訳詩からそれぞれ「鳥」「翼」「夭折したものの霊」などの語彙を取り上げつつ、「折口信夫による霊魂観が大きく介在する」と主張する。最後に、「杜甫詩の訳出という営為が成立し得た」作家の「内的必然性」を探り得なかった詩については、「訳出の意図を問うこと自体の無意味さを逆に問われることになりかねない」と述べ、「少くとも堀における中国古典文学受容には、病にことよせた切実さと紙一重のディレッタンティズムが存在したということだけは言えるであろう。」という結論に収束している。

右記の岡本論を踏まえ、「(杜甫訳詩)」ノートにある15篇の訳詩の内容を全体的に再考察する（訳詩のあて番号は第二章第1節を踏襲している）。

①「佳人の歎き」は、「高貴な家の出」で、「妖しいまでに美しい」一人の女の、「不幸」な運命を語る。

②「王宰の画に題す」は、「千里の国々を」「一枚の紙」に収めた壮大な山河図を描いている。

③「新婦は歎きぬ」は、「日暮に」「新婦」となり、「日の出に」、夫が「辺境の守備」に赴いた一人の惨めな女を詠じている。

④「放逐せられし李太白に」は、「気候」が「殺伐」な遠所に「放逐せられ」、音信不通で生死不明な状態である友李太白への歌である。

⑤「李太白に」は、「不死の者」、「清らかで豊かな、生命の泉」である詩人李太白への賛歌である。

⑥「秋の逍遥」及び⑦「晩帰」は、「他郷者」の「私」の眼に映った「秋の慰めなき姿」を描く。

⑧「舟上の美人」では、「憂愁の歌をうたふ」ところを、「神人は雲の上からそれを深く感動して聞いてゐる」ほどの、「みじめな」「美しい女」が登場する。

⑨「李太白を憶ふ」は、「偉大な詩人」李太白への賛辞と、遠く離れた友との再会への祈願を詠う。

⑩「歎き」は、「私が追放せられてゐる」地方の「陰鬱」で「貧相」な風景を綴りながら、「私はまだ王の側で寵愛せられてゐたとき、自分の本分を尽した」のに、「追放」という理不尽な目に遭ってしまう不平を訴える。

⑪「秋」は、「追放せられて陰鬱な孤独」に沈んでいる「私」が、「あくがれに充ちた目」で遥かなる首府を追い、「おゝ、愛する首府が歌と踊と世界の幸とでかがやいてゐる、方向へ首を回らしめた荒涼たる苦悩よ！」と嘆じる。

⑫「痛しき追憶」は、「王の側で寵愛せられてゐたとき」の「痛ましき追憶」が喚起される。

⑬「若き日の友に」では、「寂しく生き」てきた「年老いた漂泊者」が、「二十年の長い別離」を経た「若き日の友に」再会し得て、友人から熱い歓待を受ける。

⑭「異郷の愁」では、「追放されてゐる身」である「私」が、「遙かなる故郷に到達できない」歎きを吐く。

最後の⑮「古城址にて」では、詩人が「何んといふ君主が建てたことさえ分からない「城」の「廃址」に立って、あらゆる生が「束の間」に消えるものであることに感涙する。

ここまで概観してきたノートの訳詩を整理してみると、訳詩に詠われる人物は詩人の「私」（⑥⑦⑩⑪⑫⑬⑭）と、「私」の知人たち（李太白3篇④⑤⑨・王宰1篇②）、および三人の「女」（①③⑧）である（「廃墟」を詠んだ⑮については後述する）。

「私」の心情や境遇を詠った7篇の詩のうち、最初の2篇⑥⑦は、「憂愁」に充ちた詩人の目に映った「秋の慰めなき姿」を描いたものである。⑩⑪⑫⑭の4篇は、「追放者の身」であることを厭わずに繰り返し強調し、「王の側で寵愛せられた」時分の境遇と今のそれとのコントラストによって、不平、落胆、悲哀の念がいよいよ強まり、幸と栄華とで充ちた首府・故郷への無限な「あくがれ」(注)となる。残りの⑬は、主旋律の痛々しい心情とやや違って、友人との再会と歓待を受けるという少し心の暖かみを感じるエピソードが挟まれている。しかし、その低音部にはやはり「何処の国からこの年老いた漂泊者は来たか」という沈痛なリズムが流れている。「私」をめぐる7篇の詩は、追放者の秋の望郷詩群として読み取ることができよう。ただし、詩人にとっての「郷」は故郷であり、都でもある。

次の「私」の知人たちをめぐる4篇は、友の李太白への歌がその主流である（④⑤⑨）。「偉大な詩人」への賛歌と、「放逐せられ」た友への心配と再会への期待が主な内容を成している。②王宰に関する1篇は、彼の手によって「芸術的に仕上げ」られている絵を讃えるものである。この4篇は、芸術家への賛歌と、「放逐」された友への思いを綴ったものである。

最後の三人の「女」を詠じた詩は、①と⑧にそれぞれ登場するのは、「高貴な家の出」で、「妖しいまでに美しい」「不幸」

な「一人の女」と、「神人」を「深く感動」させるような「情ぶかい妖怪のやう〈な〉」「みじめな」「美しい女」である。前者は戦乱の中での独りで漂う身となり、後者はあたかも天界から追放されたような「塵芥の中に浮べられた、貧しい花」と象る。尊さ・美しさ・惨めさが二人の共通した特徴である。③は「辺境の守備」に遣られた夫との離別の悲しみを耐えざるを得ない「かはいさうな」新婦を描き、①と共に戦争の時代で流離や別離などの運命に翻弄される薄幸な女性像として読み取ることができる。この3篇ははかない運命を生き抜く気高い女性像を詠ったものと言える。

以上の⑮を除く14篇の訳詩を通して、芸術への謳歌のエピソード（②⑤を中心に）を交えながら、人生に失意する悲劇的な人間像が紡ぎ出されている。その「悲劇的要素」として、「追放」「放逐」「漂泊」「異郷」「離別」などの一連の言葉が綴られている。

2、「若菜の巻など」との関連から

ノートの成立期（昭和14・15年頃から17年7月まで、第二章第1節で既述）に近い時期に、堀が書いた「若菜の巻など」（昭15・8「創元」）という一文がある。そこでは、「遠い神代の、長い苦しい征伐の旅をつづけられた若い王子が、その果ては白鳥となつて天翔けられた」倭建命の伝説から、「その漂泊の原因に女性を結びつけて考へるやうになつてくる」後世の物語群――「軽太子（かるのみこ）と軽大郎女（かるのをとめ）との哀切な情史」や、「光源氏の須磨への配流が一つの大きな主題をなしてゐる」『源氏物語』――に至るまでの「トラヂックな古代人」の話を語りつつ、

（略）光源氏といふものを、或意味で日本古代の最後のトラヂックな人物のやうに考へなければいけないのではないかと考へるのです。トラヂディといふ語を悲劇と訳したのではこの場合どうもまづい、鴎外流に悲壮劇とでも訳したらまあ感じが出ませうが、――本来のトラヂディといふものは、本当に崇高な人物が、運命の抵抗に遭つて、さまざまな苦しみをしつつ、その生涯の何処かに人知れぬ涙の痕をにじませながらも、しかもその生得の崇高さを少しも失はずに、最後まで生き抜く（略）。

（傍点堀）

と唱える。その上で、「さういふ漂泊の悲しみのやうなもの」が取り入れられた「トラヂック」な「優れた人間の典型」は、源氏「以後の文学から全く跡を絶つてしまつた」ことを悲しみ、「わが国の文学は、それから隠者たちの手に渡つて、次第に面白くもないものになり、僅かにその最もいい部分が西行から芭蕉へと受け継がれていつて居」るが、「源氏物語にある本当の意味でトラヂックな精神を生かさうとしたものの一つもなかつたのは、何としても大へんな損失だつたと思はずにはゐられません。」と述べるのである。

上述の14篇の訳詩が強く堀の関心を引き、漢詩の新しい和訳の試みを挑む行為に至らしめたのは、このような近い時期における「漂泊の悲しみ」を生き抜いた「トラヂック」な人間像への深い共鳴があったのではないかと推測される。「若菜の巻な

ど」の行間には、「優れた典型の流産」に対する心痛と、それに因んでの自分の文学的野心が秘められ、⑶「（杜甫訳詩）」ノートは、そのような「優れた典型」へのアプローチの一環にあるものと考えられる。

最後の⑮「古城址にて」は、以上の14篇の詩と共通性があるというより、むしろそれらの詩のまとめ乃至内容の昇華と言えよう。ここまでの14篇の訳詩を通して、運命に恵まれない悲劇的な人間群像を紡ぎ出したと言えるとすれば、⑮は、彼らの悲劇的生涯のための一つのパラドックスの原理を説いたようなものである。つまり、詩人の「私」が、度々「あくがれに充ち」た目で追っていた「歌と踊と世界の幸とでかがやいてゐる」「首府」（⑪）は、いずれ「けふ誰がいふことが出来よう、何んといふ君主がこの城を立てたか？」（⑮）と変わり果てるだろう。また、「帝の庭の中をあちこち歩み、春の緑が彼女らのまはりで笑ひさざめく」「魅惑的な若い女たち」（⑫）や、「美装して馬に乗り、首府を近〈く〉まで、愉しげに、軽々と乗ってゆく」「栄華と富」（⑩）に恵まれていた時代の寵児らは、いずれ「黄土に帰」（⑮）して、「多くの生から、いまはただ君の墓側には石馬のみが残」（⑮）ることになるのである。

あらゆる栄華と享楽を極める生が、「短くて、束の間」（⑮）で跡も残らずに消えてしまうものである。「廃墟」は、その不変的な歴史原理を伝えるものである。が、この世に残れるものは何か？堀自身が答えるのである（「心の仕事を」（昭16・8発表紙誌不明））。

本当の人生への道は悲しみを過ぎりながら通ってゐる。その悲しみを浪費したり、その果てるのを欲したりしてはならない。そしてそれを大事にしなければならない。何故なら、すべてのものが死んで、我々が無限の生の新しい季節にはひってゆくとき、我々に残されるのはその悲しみだけだからである（略）。

「栄華」と「富」（⑩）「幸」（⑪）の世界と遥かに遠い果てにある「不幸」（①）な人達が、その無残な運命をひたすらに耐え、ないし人生のあらゆる悲しみを養分として自らの芸術を培うことによって、却って「不死の者」「生命の泉」（⑤）として生を永らえることができたと言えよう。そのことは、堀文学で追い求め続けてきた「常にわれわれの生はわれわれの運命より以上のものである」（「七つの手紙」昭13・8「新潮」）というイデーの表れでもある。

3、ノートから見られる堀の編輯意識

前節までで、〈流離〉の要素を紡いだ「トラヂック」な人間群像の詠出が、15篇の杜甫訳詩の主題であることを見出した。そのようなノート全体における内容の一貫性の確保を可能としたのは、訳者である堀の編輯行為である。その編輯行為とは、堀がドイツ語典拠にある全17篇の杜詩を概観した上で、取捨選択し再配置してからノートに訳したことを指す。

まずは、ノートに訳されている15篇の詩のあて番号を踏襲しながら、ドイツ語典拠『詞華集』にある17篇の杜詩の配列順を以下に掲げる（＊はノートにない2篇）。

⑤、「＊落日」、①、②、③、「＊春宿左省」、⑥、④、⑦、⑬、⑧、⑭、⑫、⑨、⑩、⑪、⑮

「落日」と「春宿左省」の2篇だけは、その原詩がドイツ語典拠に書込んであるにもかかわらず、ノートには採用されていない。その理由については、その内容の一部を摘出することによって自ら明瞭になるだろう。

「落日」(*Bei Sonnenuntergang*) は、春もたけなわの華やかな景色を詠ったもので、「黄金色の太陽光線が帳に差し当り、色とりどりの河岸あたりでは、春の栄光が既に完成されている」(『詞華集』より拙訳、以下同様。) から歌い出し、「この珍物のお酒！誰がお前にこれらの天から賜った力を与えただろう？私は苦難が悉く消え、一杯毎に勇気が増していくことを感じるのである」の感慨をもって収めている。一方、「春宿左省」(*Schlaflos*) は、天子の傍で勤める頃のことを記述したもので、「日が沈んだ。花が城壁の影の下で寝てしまった。鳥の軽やかな鳴き声が枝の間から奏でられる」という吟咏から始まり、「最初の一すじの微かな曙の光が地平線から顕れると、私は起きて天子を朝拝しにいく。」と歌っている。2篇の訳詩は軽快な調子で詠われたものであり、堀が選んだ15篇の沈痛な心情と趣がはっきり異なるのである。

さらに、訳詩の順番に関しては、堀が同じ主題を詠った詩を前後続くように配列しようとした形跡が看取できる（李太白を詠んだ④⑤、追放者の歌群の序奏をなす秋の「慰めなき姿」を歌った⑥⑦、追放者の「私」の心情を深化させる方向に綴った⑩⑪⑫⑬⑭⑮）。しかし、同じジャンルのものをすべて一塊にする方法ではなく、Ⅰ「薄幸な女たち」・Ⅱ「放逐された李太白への偲び、芸術家への賛歌」・Ⅲ「追放者の「私」」という三つの主題を交叉的に繰り返し歌っているうちに（Ⅰ　Ⅱ　Ⅰ　Ⅱ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅲ　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅲ　Ⅲ　Ⅲ　Ⅲ）、同一な主題を持ちつつ、展開が異なる話を繰り返すことで、主題が深まっていく。堀が『美しい村』(昭9・4　野田書房) で試した「遁走曲」(フウグ)[六]という音楽的手法が施されている傾向さえ読みとれる。

『詞華集』にある杜甫訳詩群の再編輯行為を通して、〈流離〉の要素が生かされた「トラヂック」な人間群像の悲歌が奏でられるのである。漢詩の新しい訳に挑み、訳詩全体の統合性を真剣に考慮しつつ推敲してノートに書込む堀の行為を支えるのは、何よりも彼の文学的志向からの杜詩への深い共鳴だと推察される。

次章では、堀におけるその〈文学的志向〉の具体像を示しながら、ノートの成立内因に迫っていく。

第四章　堀と折口信夫〈貴種流離譚〉

1、〈貴種流離譚〉との接点から

「若菜の巻など」では、「優れた人間の典型」としての「トラヂックな古代人」を中心に述べていることは前言した。堀は「折口さんが暗示せられてゐるやうに」と断った上で、「トラヂックな古代人」の事例を、遠い神代の倭建命の伝説から引き出している。さらに、「折口さんの考へられるやうに」と引き

合いに出しながら、「そのやうな神に近かつた若い王子の旅の物語」にある、「漂泊の悲しみのやうなもののみが次第に人々に強調せられて、それを一層現世的にするために、その漂泊の原因に女性を結びつけて考へるやうになつてくる」傾向を指摘している。その上で、「軽太子と軽大郎女との哀切な情史」をその一典型と見なし、「それがいくつかの似たやうな物語」――「石上乙麻呂の流離の歌や、中臣宅守と狭野茅上娘子との悲恋の相聞」――に「姿を変へながら、「不遇な業平をそれとなく主人公のやうにした伊勢物語」といった王朝物まで続き、「光源氏の須磨への配流が一つの大きな主題をなしてゐる」『源氏物語』は、「最後のそして最高の完成」と唱えている。

これらの一連の発言は、折口信夫の〈貴種流離譚〉を下敷きにしていることは、既に大森郁之助論での言及がある（大森郁之助「堀辰雄に於ける所謂日本回帰の虚実」（「札幌大学教養部・短大部紀要」昭53・9））。しかし、その出典についての考察はほとんどされていないようである(七)。「若菜の巻など」が書かれた昭和15年8月までの間の、折口が〈貴種流離譚〉について触れた論考の中、堀の発言と共通する部分があるものに、次の4点がある（以下はその共通部分のみを掲げる。なお、掲載形式は、発表年月「論考名」（発表誌）――典型的な事例（類似事例）→論旨）。

㈠大正13「国文学の発生（第二稿）」（「日光」）――軽皇子（倭建命・石上乙麻呂）→神の流離譚の形に、その漂泊の原因を恋と結びつける。

㈡大正15「相聞の発達」（草稿。『古代研究』（昭4　大岡山書店）の著作年一覧による）――軽太子（宅守相聞・乙麻呂の流離）。

㈢昭和8「日本文学の発生」（「日本文学講座」）――軽太子と軽大郎女（石上乙麻呂・中臣宅守と茅上郎女…源氏物語）→人生観を誘導している。

㈣昭和15・4「上代の日本人」（「大阪毎日新聞」）――貴族が女性のために失脚し、悲しい流浪の旅に出る物語（石上乙麻呂・中臣朝臣宅守…記紀にあるもの・源氏物語の須磨と明石の巻）→文学における悲しみの発見は、日本人の情操の世界における一大発見である。

最初の2点の論考に関しては、堀が昭和12年頃から座右の書として親しみ始めた『古代研究一』（昭4　大岡山書店）に収録され（小谷恒「堀辰雄と折口信夫」（昭38・7「国文学」））、さらに、彼は㈡㈢にある〈貴種流離譚〉の記述に該当する部分を、それぞれ「（国文学の発生）」と「古代研究㈡」ノートに書込んでいる(八)。それらの点を鑑みると、堀が「若菜の巻など」を書く以前に、既にその2点の論考を視野に入れていたと言えよう。堀が「若菜の巻など」で言う折口によって「暗示」されている倭建命の事例（㈠）や、軽太子を〈貴種流離譚〉の情史化の一典型として扱う傾向（㈡㈢）は、そのあたりを受けている可能性が高いと考えられる。一方、昭和10年代前後に入ると、折口の〈貴種流離譚〉をめぐる思考は、「日本文学の発想法の一類型」（「日本文学の発生」）との認識に止まらず、「人生観」の「誘導」（㈢）や「文学における悲しみの発見」（㈣）などのような、より深く思想性と関わってくるところまで掘り下げら

れている。堀が文中で唱えている文学における「トラヂックな精神」は、㊃のいわゆる「文学における悲しみ」と一脈通じており、「若菜の巻など」の中心論点の生成段階では、㊃によって示唆された部分が考えられる。

以上のことを踏まえ、⑶「（杜甫訳詩）」ノートに詠出された詩の主人公の特徴を再考すると、彼らの間にはほとんど流離の悲しみが共有されている（追放者である「私」と「放逐され」た友李太白を中心に）点に加え、「高貴な家の出」（①）・「神人」と交感でき（⑧）・「不死の者」「生命の泉」（⑤）と言うほどの高貴な性質を帯びている者たちである。ノートは、「若菜の巻など」の唱えるところと軌を一にしており、同じく折口〈貴種流離譚〉の影響内にあると推察される。

このように、堀が関心の触手を中国古典に伸ばす際にも、常に折口の学問に牽引されている現象が看取できる。そのことは、昭和15年あたりに、堀の裡には、源氏以後に途絶えた「優れた人間の典型」としての〈貴種流離譚〉を、自らの文学に新たに生かそうとする意気込みが潜んでいたことを物語っていると言える。

2、堀文学における〈貴種流離譚〉受容のあり方

堀研究では、〈貴種流離譚〉の受容を正面から取り上げた先行論が殆どなく、竹内清己と饗庭孝男の短い言葉での言及に止まっている。竹内は、堀が「自己を下町の異種、つまり鶴、貴種」と意識し、「貴種としてあるべき、あらたなふるさとを求めて旅立つ」ことが、「堀辰雄の文学の形成となり後半の折口信夫との邂逅となる」（竹内清己「堀辰雄における日本古典・伝統――資材として――」（「千葉大学教養部研究報告」平2））と述べる。その論説の立脚点は、概ね作家論的なところにあると言える。つまり、堀が早年から抱いた「下町の王子」（竹内清己「堀辰雄論」（「国文学　解釈と鑑賞」昭63・10）という自意識、さらにそれを出発点にして人生と文学の旅路そのものを、一つの〈貴種流離譚〉として読み取っているのである。一方、饗庭孝男は、「『曠野』の女主人公の、その生涯の彷徨と死におわる結末は、折口の言語のなかで言えば、いわば「貴種流離譚」のカテゴリーに属しよう」と語る。その上で、「堀辰雄の内部ふかく、「曠野」の女と「花を持てる女」は通底する要素によって息づ」き、「諦念と忍耐に生き、しかも純な心を失わぬ「貴種流離譚」の俤をよみとることができる」と主張する（『イマジネールの考古学』平8・4　小沢書店）。が、饗庭が〈貴種流離譚〉としてとらえた二点の作品の主人公のどちらも、「神あるいは神のように尊い種姓の人」（西村亨「貴種流離譚」（『折口信夫事典　増補版』平10・6　大修館書店　所収）とは言い難いだろう（『曠野』の主人公は没落した中務大輔の娘で、「花を持てる女」の主人公は江戸の落ちぶれた町家の娘として生まれた「母」である）。〈貴種流離譚〉の概念が堀文学に移植される際に、「下町の王子」（前出）の自意識を抱いた「堀辰雄の身にそなわった」「一種の貴種流離譚」[九]に変容していったことが言えるかもしれない。

本節では、先行論を踏まえ、堀文学から〈流離〉の要素を取り入れた小説を抽出した上で、堀は〈貴種流離譚〉をいかなる意図の下で、さらに、どのような方法で受容していたかを解き

明かす。それらの一連の考察によって、ノートの成立内因に迫りたい。

堀の小説で、〈流離〉のモチーフを織り込んだものは下記の通りである（『作品名』（書誌）／〈流離〉する人物とそのエピソード」の順で掲載）。

㈠『姨捨』（昭15・7「文芸春秋」）
信濃路を下っていく主人公の一行の旅姿を以てストーリーを閉じている。

㈡『朴の咲く頃』（昭16・1「文芸春秋」）
「他所者（よそもの）」として「孤独な暮し」を送り、「何処の誰といふこともなしに死んで行く」「山の村」に「流れ込んで来てゐる爺や」の話。

㈢『菜穂子』（昭16・3「中央公論」）
「自分の一生を決定的なものにしようと」する旅に飛び出し、「夭折者の運命」（「菜穂子」創作ノート）が予兆される都築明。

㈣『目覚め』（昭16・9「文学界」後に『楡の家　二』と改題）
「古い北京の或物静かなホテルで」、「空しく最後の息を引きと」る森於菟彦。

㈤『曠野』（昭16・12「改造」）
京を離れて近江へ下り、旅先の近江で死を迎える「世にもさみしい」「一人の女」（「十月」（「婦人公論」昭18・1～2））。

㈥『ふるさとびと』（昭18・1「新潮」）
旅人の行き来する寒村を舞台にし、登場人物の多くが他郷者の姿として表出される。

＊㈦「十月」（「婦人公論」昭18・1～2）＊未完成

「日本に仏教が渡来してきて、その新らしい宗教に次第に追いやられながら、遠い田舎のほうへと流浪の旅をつづけ出す」「流謫の神々」。

＊㈧「（出帆）」（生前未発表、昭19～20年　推定（十））＊未完成
難波津から出帆し、筑紫へ向かう旅をたどる防人たち。そのうち、対馬に赴く送糧船の難破で遭難する主人公の乎刀良。

「若菜の巻など」と㈢「（杜甫訳詩）」ノートを書いた昭和15年前後より、病後の不毛な生活に入った昭和20年代に至るまでの間は、堀文学では〈流離〉というイデーがいきなり大きく育まれ（十一）、最晩年の未完成の万葉小説（「＊」で記した㈦と㈧）にまで長く尾を引いている。その関心の執拗さを察するにあまりある。

そのうえ、上掲の8篇の小説（未完の二つを含む）を見渡すと、〈流離〉する人物の結末は、いずれも漂泊の果に死去することになっている【㈡、㈢、㈣、㈤、㈧】。〈貴種流離譚〉では、低い身分に落ちて流離し辛苦が極まった結果、元の場所に戻って幸福に転じるか、はかない生を終えるという二つのバリエーションがあり、堀はその後者にばかり目を向けていたと察せられる。似たような傾向は、堀の折口学習ノートからも窺える。彼は「古代研究㈡」ノートに、「ツレナイ世ノ中ニ小サクナツテ遠国ニ露命ヲツナグ貴種ノ流離物語ヤ、（略）純デ素直ナ貴種ノ人ガ色々ナ艱難ヲ経タ果ガ報イラレズシテ異境デ死ヌル悲シイ事蹟」と書込んだり、そのうえ、「古代研究㈠」ノートなどにおいて、『万葉集』で歌っている「異境デ死ヌル悲シイ事蹟」の用例を集めたりしていた形跡が認められる（十二）。そのよ

うな現象に至らしめた原因は、堀文学の従来のイデーである〈死〉〈鎮魂〉との関連があるほか、〈流離〉の悲劇性を最大限にまで生かした「トラヂック」な文学を大きく育てていこうとした堀の意図が考えられる。

このように、〈流離〉した果てに異境ではかない生を終える人物を次々と造形しながら、堀最後の小説【六】の辿りついた涯は、旅人の行き来する寒村――分去れの村――である。「此の村の人ではなかつた」おえふ・草平・しげ・捨吉等によって支えられている落ちぶれてしまった昔の本陣である牡丹屋、その宿で一夏を泊まっては去って行く旅人たちが登場する。さらにその後に構想した万葉小説では、「流謫の神々」の群像（【七】）や東国から筑紫へ向かう長い旅路をたどる防人の集団（【八】）が描出される。つまり、個々の人物に〈流離〉のモチーフを取り入れることから（【一】～【五】）、登場人物全体に〈他郷者〉・〈流浪者〉の面影を彷彿させるに至ったのである。堀は、〈流離〉を一つの個別現象から、集団的・普遍的現象にまで高めていく方向へ持っていったと言える。

折口は、神を奉じた〈ほかひびと〉の団体が、旅路の各地で散布した〈貴種流離譚〉によって、「陶冶の足らなんだ地方人の爲に、深い人間としての教養を与へ、追つては、文学の持つ普遍の悲しみに到達せしめるやうにして行つた」（「小説戯曲文学における物語要素」（「日本評論」昭18・1））と唱える。つまり、〈貴種流離譚〉が日本文学の「種子」として、日本人に一番最初に文芸の悲劇性に触れさせ、その「文学心を培うた」のである。折口の考えによると、「文学が、一番我々の心を打つのは、悲劇精神である」。「此を掘り湛へて行くと、人生の深さに触れて来る」（「日本文学の内容」（「日本評論」昭17・8～18・4））。

そのような折口の言説に出会った堀は、〈流離〉というモチーフの悲劇性、及び普遍性を追求しつつ、「人生の深さ」（前出）、「文学といふものの本来のすがた」（堀辰雄「伊勢物語など」（「文芸」昭15・6））の深層へ掘り下げていこうとした。そのことは、昭和10年代後半の堀文学の大きな傾向の一つであり、ノートを為すことに至らしめた最大の要因にもなる。

3、〈流離〉の詩人――杜甫への傾倒

ノート⑶「（杜甫訳詩）」は、「晩年の堀の心情が仮託されている」といった「一般論的解釈」（岡本論）で片付けられてきたことは前言した。それに加え、ノート⑵にある15篇の杜甫訳詩についても、「流浪・寂寥の思い」（内山論）が詠われていることを認めてはいながらも、「出生の地でもある東京を離れ」て軽井沢に客居する「堀辰雄をして自己を投影させるに足る」（長谷部論）という結論に収束している。しかし、堀の杜詩訳出行為、ないし杜甫への傾倒は、今までの先行論で唱えられてきた〈心境説〉の領域を遥かに超えているものである。

堀は鈴木虎雄の『支那文学研究』（昭2・12　弘文堂書房）を学びながら、以下のような傍線メモを残している（蔵書メモは堀辰雄文学記念館所蔵堀旧蔵書による。以下同様）。

古来一局部に偏在せし人物に大文豪なし。司馬遷と杜甫

は支那の文章と詩の大宗なり。この二人共に天下を周遊し名山大川を跋渉せし人なり（略）。　（傍線堀）

さらに、彼の杜詩学習メモを調査したところ、夥しい杜詩の中でも、詩人自ら「紀行詩」だと定義している二組の詩（「秦州を発して同谷に至る間の紀行」及び「同谷成都間の紀行」）に高い関心を示している傾向が認められるのである。その二組の「紀行詩」は、前記の堀蔵書『支那文学研究』の「杜甫の紀行詩」で紹介されている。堀がそれを耽読していたことは、該当章節に栞の紐が挟まれているほか（一四九頁と一五〇頁の間）、書込みが見られることからわかる。そのことにとどまらず、堀がそれらの詩を、さらに蔵書《杜詩銭注》[《杜工部詩集》]（銭牧斎箋注　中華民国24年　世界書局）及び、《杜詩偶評　巻一》（沈帰愚点定　蔡晋伯題簽　賦閒草堂蔵板）をもって丁寧に調べたことは、両書の目録にある二組の紀行詩の詩題と一致するものに悉く印（赤い色鉛筆で題名の冒頭に「・」）を付けてあることから判断できるのである。

杜甫が堀の関心を惹起した原因には、生涯の大半を羈旅で費やした詩人である側面が大きかったと推察される。同時に、杜甫訳詩ノートが書かれた最大の理由は、従来の心境説にとどまるものではなく、〈貴種流離譚〉の中の〈流離〉という悲劇要素を紡いだところにこそある。

第五章　むすび

本稿は、堀が漢詩原詩を特定する際に用いたテキストは漆山の『唐詩選』と『杜詩　訳註』であることを究明した。さらに、ドイツ語典拠から堀訳に至るまでノートの生成過程を考察し、西洋人によってデフォルメされた〈杜詩〉の享受において堀の着眼があったことを説明した。その上で、ノート全体の内容を再考し、〈流離〉の要素を盛り込んだ「トラヂック」な人間群像の詠出の点においてノートの主題を探り出した。最後に、折口〈貴種流離譚〉の影響を視野に入れ、ノートの訳出動機ないし杜甫への関心の所在を堀文学に立ち戻って追究した。

堀は、漢詩を洋書で読んだ上で、折口学の牽引によって洋書典拠にある訳詩を再組織し、訳詩ノートを為したと見える。このように、ノートは、和・漢・洋の要素が同棲し、堀晩年の志向を反映するものとして、注目に値する点が多々あるのである。

[注]

（一）堀蔵書目録にある杜甫関係の書籍や、日中両方で刊行された当時一般的に使われていた杜甫詩集や注釈書を調べたところ、堀の書込んだ9篇の杜詩をすべて収載し、かつ堀が書いた本文と全く一致するものは、漆山の『杜詩　訳註』しか見当たらなかった。堀の書込んだ「新婚別」という詩を例にし、調査対象書物（堀が書き込んだ9篇の詩をすべて収録した書物を、日・中刊行に分けて掲載）とその結果を以下に簡単に記す。

・調査対象物（日）―『杜工部詩醇・精選』（近藤元粹　明30　青木嵩山堂）、『続国訳漢文大成・杜少陵詩集』（鈴木虎雄　昭3・7　国民文庫）、『漢詩大観・杜少陵詩集』（佐久節　昭18　井田書店）。

・調査対象書物（中）―堀蔵書《杜詩偶評》（偶）、《杜詩銭注》

（銭）、《杜詩鏡銓》（鏡）、『杜詩講義』（講））、その他（《読杜心解》（心）、《杜詩詳註》（詳）、《唐宋詩醇》（醇））。

・調査結果（堀の書込み―各刊本の本文との相違箇所）

「結髪爲妻子」―「君妻」（偶・鏡・講・心・近藤本・鈴木本・佐久本）

「無乃太忽忙」―「悤忙」（偶・講）　「匆忙」（鏡・心・詳）

「君今死生地」―「往死地」（偶・銭・鏡・講・心・醇・近藤本・鈴木本・佐久本）　「生死地」（詳）

「誓欲随君往」―「随君去」（偶・銭・鏡・講・心・詳・醇・近藤本・鈴木本・佐久本）

なお、『杜詩　訳註』は『唐宋詩醇』を底本にしていると著者の漆山自身が述べるが、上掲の調査結果からわかるように（乾隆25年の陳弘謀重刊本を参照）、両者の間には二か所の相違がある（死生地―往死地、往―去）。堀は『杜詩　訳註』の本文をそのまま踏襲しているのである。

（二）典拠に関する記載は『詞華集』の巻末にあり、4篇の『詩経』訳詩（*Chi-King ou Livre des vers*（1872 Par G. Pauthier,Paris）による）を除くほか、『唐詩』と『玉書』の二書による。

（三）主な意味的改変が発生している箇所を以下に掲げる。第二章第1節の訳詩番号を踏襲し、掲載形式は、堀訳の後に［　］内に稿者による『詞華集』の直訳を付す。

①運命が稀に彼女を援けたやうな妖しいまでに美しい一人の女が坐ってゐる［怪しいまでに美しい一人の女が坐っている。運命が稀に彼女を助ける］。③それはわづかに酬いられて、我々の床がわづかに温められた故に。［それは殆ど価値がなかった。我々の床は殆ど温められなかったのに、愉しい時間が既に終わってしまったので］。⑦鶴が［一羽の雌の鸛が、彼女の亡くなった夫が帰ってくるのを見たように］。⑧（対応の訳文なし）［そこで新しい楽園が輝いている］。⑩窀［冢］、暗い［暖かい］。⑪柳［円柱］、後の［錦の］。

（四）漢詩の新しい和訳を試みたものとして、土岐善麿『鶯の卵』（大14　アルス社）、佐藤春夫『車塵集』（昭4　武蔵野書院）、岡田正三『詩経』（昭8　第一書房）、小村定吉『邦訳支那古詩』（昭10　椎の木社）などがある。最初の一点を除いた上掲の書物が堀蔵書にも収蔵。

（五）「あくがれ」は「遊離魂」と関わる言葉であり、堀作品では折口の影響を受け、「あこがれ」と「あくがれ」を区別して使っていることは、堀竜一の「〈幼年〉と〈ふるさと〉――堀辰雄の「あくがれ」に関する一考察」（「文芸研究」昭62・5）で論じられている。

（六）堀はバッハの「遁走曲」について、「あの主題と応答とが代る代る現はれては消えてゐるうちに少しづつ曲が展開してゆく（略）。その執拗な走法の効果が、この頃僕の中に小説のいろんなテエマがふと消えてゆく、そのうちにそれが少しづつ発展して来てゐるやうな気もする、さういつた具合にそつくりだつた」（「手紙（「美しい村」ノオト）」昭9・4　野田書房）と述べる。

（七）中島昭は、「折口信夫の著作を堀がいかに読み、作品に取り入れたかを」示す一覧表を作り、「若菜の巻など」の出典を「相聞の発達」だとしているが、その具体的な論拠などについては触れていない（「折口信夫受容についての素描」（『堀辰雄――昭和十年代の文学』平4・12　リーベル））。

（八）ノートの成立時期に関しては、中島昭はそれぞれ昭和14～15年

6月、昭和12～15年と推考している（「折口信夫受容についての素描」前出）。

（九）この発言は、竹内清己が堀の未完成小説「〈出帆〉」について論じたときのものである（『堀辰雄と昭和文学』（平4・6　三弥生書店））。

（十）小久保実は、「古典ノオトの解説」（『堀辰雄全集　第10巻』昭40　角川書店）において、昭和19年12月28日付、葛巻義敏宛書簡に、「この次ぎの仕事（万葉もどきの小説）のことなどぼんやりと考へてゐる　この冬ぢゆうにすこし位手をつけたいものだと思つてゐる」とあることから、「〈出帆〉」の成立年代は、「昭和十九年の冬からのち、翌年の二十年」だと推定している。

（十一）昭和15年以前の堀作品では、〈旅〉の要素が織り込まれた作品が散見されるが、いずれも青春期の軽はずみな小さな旅である（恋のイデーを展開させるためのものとしてよく使われ、旅の目的地の多くは神戸の設定になっている）。〈漂泊〉〈流離〉などの「トラヂック」な要素からはやや程遠いものである。しかし、それより以降の8篇の小説（本文掲載の㈠～㈥、及び「野尻」（「婦人公論」昭15・9）、「花を持てる女」（前出））には、例外なく〈流離〉の要素が織り込まれている。

（十二）「大伴ノ君熊凝（くまこり）ハ肥前国益城（ましき）郡ノ人ニテ、年十八歳ナリ。天平三年六月十七日ヲ以テ、相模ノ使某国司官位姓名ノ従者トナリテ、京都ニ参向（まゐむか）ヒツ。天ナル哉。不幸ニシテ路ニ在リテ、疾ヒヲ獲テ、安藝国佐伯郡高庭ノ駅家（はゆまや）ニテ身マカリヌ。」といった内容が見られる。

（りゅう　けん・大阪公立大学文学研究科都市文化研究センター研究員）